



「私の土木」を俯瞰し 相対化しよう



大石 久和

土木学会 第105代会長

われわれ土木人は、それぞれ多様な職域で働き、それぞれが異なる専門分野で社会に貢献するために懸命に働いている。また、学生諸君も総括的には土木領域とはいえ、異なる分野の学習や研究にいそしんでいる。

土木人は、各人各様の土木に向き合っている。その向き合っている土木は、それぞれに「公共」の世界にある。インフラを提供する公共事業はもちろん、電気・ガス

事業、鉄道事業なども公共という縛りの中にあるからである。

土木のすべてが、「公共による公共のための事業、サービス、奉仕」という世界のなかにあると言っても過言ではない（民間土木の世界がないわけではないが、きわめて少ない）。

そのため、土木は「国民の税

（国債を含む）や料金」での負担による事業が実施されることで、はじめて人びとに成果を還元できるのである。

これを民営化してレントシーキングに身を任せよとの主張もあったが、これは事柄の本質ではない。基本中の基本は、土木とは国民から国民（その多くが将来世代）への利潤動機では提供することが難しい「財とサービス」であるからである。

逆に言えば、人びとに成果を還元できない土木など、あり得ないと言ふことなのだ。土木は広範な広がりを持っているから、そこでの深化は十分にやりがいを見いだせる価値を感じることができるといえるのだ。

調査、設計、施工、研究、行政という切り方で見ても、構造、河



川、道路、港湾、計画などという切り口で考えても、それぞれが広くて深い。その深いことが、「土木とは全体として公共による公共への奉仕だ」という「全体土木という原点」への回帰を忘れさせる危険を秘めているのである。

ここにこそ、土木人の矜持と生きがいが存在している。上空から「公共の世界から見ると」という俯瞰的な目を持つことが、土木人の土木人たるゆえんなのである。下から上へという「葦の髄から天井を覗く」という陥穽に最もはまってはならないのが土木である。

近年、若者の関心が身近な世界に籠もりがちで、世界とか日本とに関心がないか、薄くなっている傾向が強くなっている。国家公務員に新規採用された者でも、国家的な大きな問題に向き合う意

識が低いと言うが、これでは日常業務の上位目的を認識することができない。

かなり以前から、神社などへの願い事も世界平和とか日本の繁栄から、家内安全や自身の受験合格など、自分や身近な事柄に関する願いが増えていると教えられたことがある。

自分（の関心事項）を大きな容れ物の中に入れてみないと、自分（＝自分の土木）など見えてこないというのは、論理的にも絶対的真実である。特に土木には、これが必要なのだと強調したいのである。

「広いからこそ深いのだ」という梅原猛氏への芳賀徹氏からの評価を、われわれ土木人は十分に噛みしめたいのだ。